

令和元年6月21日現在

機関番号：34510

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16735

研究課題名（和文）ルネサンス期の芸術家一族の活動と近代的芸術家像の確立：ギルランダイオ工房を中心に

研究課題名（英文）Painting as Family Business and the Modern Concept of the Artist: The Ghirlandaio Workshop and Other Renaissance Cases

研究代表者

伊藤 拓真 (Ito, Takuma)

神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：80610823

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ルネサンス期に芽生えつつあった「芸術」や「芸術家」という概念と、工房システムをはじめとする伝統的な制作形態との関連の解明を目的とした。特に、中世以降続く家族経営の工房に注目し、15世紀末のフィレンツェにおいて一大工房を築き上げたドメニコ・ギルランダイオを主たる研究対象とした。ギルランダイオ一族の工房を構成していた個々の画家の活動実態を明らかにするとともに、後世に記述された芸術批評的文献の内容と実際の活動の比較検討を行い、制作者の活動が近代的な文脈で解釈されていく過程を明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の社会における「芸術」や「芸術家」という概念は、決して自明のものではなく、歴史的な経緯のなかで形作られてきたものである。現在までその存在が広く知られている芸術家の多くがルネサンス以降の芸術家たちであることからわかるように、イタリア・ルネサンスをそのひとつのターニング・ポイントとしてあげることができる。この過渡期にあって、中世以降引き継がれてきた職人としての制作者の立場が、いかにして近代的な「芸術家」としてのものに変化していくのかを検証することで、現代社会における芸術の概念をより明確に理解できるようになる。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to clarify the relationship between the emergence of the modern concepts of art and artists and the traditional workshop practice in Renaissance Italy, especially that of the family-run workshops. For this purpose the workshop of Domenico Ghirlandaio was studied in detail. The activities of the painters involved in the workshop and how they were described in the later historiography were analyzed. Results have successfully identified some essential aspects in the formation of the modern artistic concepts.

研究分野：美術史学

キーワード：イタリア・ルネサンス ギルランダイオ フィレンツェ美術 芸術家工房 美術批評史 ヴァザーリ『  
美術家列伝』

## 1. 研究開始当初の背景

西洋近代における自律的な「芸術」の概念や、特殊な才能を持つ存在としての近代的芸術家像の確立の歴史において、イタリア・ルネサンスはその端緒と位置付けられる。この時期活躍したラファエロやミケランジェロは、後世における「芸術家」のイメージを決定づけたといっても良い。近年、芸術や芸術家の概念の多様化に伴い歴史的検証も活発化しており、2016年9月に北京で開催された国際美術史学会(CIHA)においても、A・ノーヴァが議長を務める予定のセッション「芸術家の自己意識・自己主張」で、イタリア・ルネサンスが主要な対象の一つとして挙げられた。その一方で、ルネサンス期の作品制作の実態は、中世からの伝統を色濃く残すものだった。一人の芸術家によって作品が着想から完成まで導かれることは稀であり、共同制作者や助手などの工房の参加は常態化していた。また「芸術家」という概念自体も未成熟なものであり、画家や彫刻家といった職業はしばしば親から子へ引き継がれる職人的な「家業」として成立していた。

本研究の主たる対象となったドメニコ・ギルランダイオ(1448-1494)が活躍した時代は、近代的芸術家像が確立する盛期ルネサンスへの過渡期にあたる。ギルランダイオ工房はドメニコとその一族によって運営されていたが、同時にミケランジェロなど次世代を代表する芸術家たちに徒弟として活動する場も提供した。ドメニコの死後、工房は弟のダヴィデ、ベネデット、義弟のセバステアノー・マイナルディ、そしてドメニコの子リドルフォによって引き継がれた。フィレンツェ滞在中のラファエロもリドルフォと親交を持ち、ギルランダイオ工房に伝えられる様子を学んだとされている。2010年から2011年にかけてのフィレンツェやマドリードにおける展覧会(Ghirlandaio, una famiglia...; Ghirlandaio y el Renacimiento...)でも示唆されたように、ギルランダイオ工房は一族としての活動を通じてルネサンス美術の展開に重要な役割を果たしたのである。

研究開始の時点において、申請者は15世紀から16世紀初頭の聖堂装飾についての研究の一環として、ドメニコ・ギルランダイオに関連する研究を進めていた。国際学会での口頭発表を経てMitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz誌に掲載された論文では、画家の代表作であるサンタ・マリア・ノヴェッラ祭壇画の再構成を行い、散逸していたパネル群を同定すると共に、祭壇画の制作に工房の複数の画家が関わったことを裏付けた。さらに、ステンドグラス制作など従来のギルランダイオ研究では見逃されてきた分野についても研究を行い、イタリアにおいて学術図書を刊行するなど、多数の機会に発表した。これらの研究の過程で、ギルランダイオ工房に関連する作品や未公文書の所在の確定を進めている。その傍らで、G・ヴァザーリの『美術家列伝』やF・バルディヌッチ『美術家消息』など、16世紀以降の美術批評における芸術家像形成についての研究も行っていた。美術史においてルネサンスは近代への転換点と位置付けられているが、制作の実態に即した研究を進めるためには、工房をはじめとする慣習的システムとの関連を踏まえた論考が不可欠である。そのため、盛期ルネサンスの芸術家たちにも大きな影響を与えたギルランダイオ一族の工房を研究対象として選び、本研究を着想するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、ルネサンス期に新たに芽生えつつあった「芸術」や「芸術家」という概念と、工房システムをはじめとする伝統的な制作形態との関連の解明を目的とした。そのために、15世紀末のフィレンツェにおいて一大工房を築き上げたドメニコ・ギルランダイオ(1448-1494)を主たる研究対象として選定した。

本研究では(1)ギルランダイオ一族の工房の実態を明らかにするとともに、(2)ルネサンス期以降に記述された芸術批評的文献の内容と実際の活動の比較検討を行う。その結果を踏まえ、(3)近代的芸術家像の確立の過程におけるルネサンス期の芸術家一族の位置付けを特定することを目指した。以下、各項目について説明する。

(1)ギルランダイオに関する先行研究の多くは長兄であったドメニコにのみ注目するもので、それ以外のメンバーの活動については大部分が未解明のままに残されていた。弟のダヴィデ、ベネデットのほか、義弟のマイナルディ、あるいはバルトロメオ・ディ・ジョヴァンニのような外部から招かれる共同制作者など、工房は多様なメンバーから構成されていた。彼らはギルランダイオ工房の一員としてドメニコを中心とした作品制作に携わると同時に、独立した作品も制作した。本研究においては関連する作品と古文書の調査を通じて個々の芸術家の活動を明確にした上で、一族としての工房運営の実態を解明する。

(2)上記(1)で対象としたギルランダイオ工房の実態を踏まえた上で、同時代および後世に執筆されたギルランダイオに関する美術批評的文献との比較検討を行い、ギルランダイオとその工房、特に一族のメンバーの活動がどのように解釈され、「芸術家」としてのイメージの形成が行われたかを明らかにする。近代的美術史学の成立の過程で、芸術家としてのギルランダイオのイメージが定まる19世紀初頭までに執筆された文献を調査対象とする。

(3)ルネサンス以降に成立した一種の個人主義的な芸術家像に反して、一族による工房運営は

ルネサンス期において大きな位置を占めていた。ギルランダイオー族以外にも、フィレンツェのポッライオーロ兄弟、サンガッロー族、ヴェネツィアのベッリーニー族などの例を挙げることができる。これらの一族の事例と併せて検討することで、批評史的な文脈における近代的芸術家像創出の過程において、芸術家一族という存在がどのように位置付けられたかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 先行研究の精査および関連作品の特定

従来のギルランダイオ工房に関連する研究の大半は後世の芸術家伝説的な文脈で形作られてきた概念に依拠するものであり、「芸術家伝説」的要素を客観的な分析の俎上に乗せるためにも、本研究の初期段階での実証的作品分析が不可欠である。現在、ギルランダイオ研究においては J・カドガンの著作、および R・ケックスによる著作が標準的モノグラフとして受け入れられているが (Cadogan, Domenico Ghirlandaio..., 2000; Kecks, Domenico Ghirlandaio..., 2000) 、その後開催されたマドリッドの回顧展 (Ghirlandaio y el Renacimiento..., 2010) でも示されたように、既存のモノグラフは関連作品を網羅するには至っていなかった。そのため、関連する作品を特定し、リスト化することで、以後の研究の基礎資料とした。一族のメンバーに加えて、バルトロメオ・ディ・ジョヴァンニ、ヤコポ・デル・テデスコら、工房と強い関連をもった画家を調査の対象とした。また、ドメニコの弟ダヴィデおよびベネデットに関しては、下記の調査を重点的に行った。

#### (2) ダヴィデ・ギルランダイオに関わる作品一覧の確定

近年一部の先進的な研究により、ドメニコの弟であるダヴィデが一族の工房内で重要な役割を果たした可能性が示唆されている。さらなる検討を進めるために、ダヴィデの基準作とされる《磔刑と 5 聖人》(フィレンツェ、サン・サルヴィ美術館) および《聖母子と 4 聖人》(ベルリン、国立絵画館) の実見調査を行った上で、先行研究においてギルランダイオ周辺作として漠然と位置付けられている諸作品と比較し、ダヴィデに帰属可能な作品を確定した。

#### (3) ベネデット・ギルランダイオに関わる調査の開始

ベネデットについて信頼に足る先行研究は存在していなかった。真作として広く認められる唯一の作品は、エギュペルス (フランス) に現存する大型祭壇画《降誕》である。基準作がフィレンツェから遠隔地にあるという条件は画家に関する研究を困難なものとしているが、申請者はクレルモン＝フェラン大学 D・リヴォレッティ氏の協力のもとエギュペルス地域文化協会と連絡を取り、現地での調査を実現した。その調査にもとづき、関連作品との比較検討を進めベネデットの作品一覧の確定を行った。ベネデットは写本装飾にも携わり、1486 年から 1493 年頃にフランスに滞在していたことも知られている。その活動の解明は、写本装飾と絵画の関係やイタリアと北方美術との関係など、関連する諸テーマへの寄与となる。

#### (4) 実見調査、写真資料の検討、素描調査を通じた関連作品の多角的検討

帰属や制作年代の曖昧な作品や、工房の助手・共同制作者の関与が強い大規模な祭壇画や壁画を中心に実見調査を進め、関連作品の確定・分析を進める。既にあげた諸作品以外には、初期の主要作品であるサン・ジュスト祭壇画から解体された諸断片や、ヴァチカン宮殿旧ラテン語図書館壁画などの調査を行った。散逸・消失した作品や所在不明の作品を分析に含めるために、フィレンツェ美術史研究所写真資料室、フェデリーコ・ゼーリ財団などが所蔵する写真資料を活用した。また、作品の構想から工房による制作の過程を明らかにするために、ベルリン国立博物館群素描版画室に所蔵されているサセッティ礼拝堂関連素描や、ウフィツィ素描版画室所蔵のダヴィデ・ギルランダイオ関連素描などを調査対象とする。

#### (5) 批評史的文献の精査

19 世紀初頭までのギルランダイオに関する批評を網羅的に確認し、実際の活動内容と比較する。16 世紀半ばの G・ヴァザーリ『美術家列伝』や 17 世紀後半の F・バルディヌッチ『美術家消息』などの伝記的文献などを確認した。ミケランジェロが徒弟時代を過ごしたこともあり、ギルランダイオ工房の活動には 16 世紀半ば以降多くの記述が残されている。これらの記述は大きな史的価値を持つと同時に、伝説的な工房の姿を作り出すことにもなった。一例として、多くの先行研究では義弟マイナルディがドメニコの「右腕」として工房で長期間働いたとしているが、これは『美術家列伝』によって形成された誤解であり、実際にはマイナルディが工房に関与した期間はドメニコ晩年の数年間に限られる。ヴァザーリが「義弟」であったマイナルディの活動を強調した背景には、血族によって運営される工房という性質を和らげ、個々の芸術家の能力・特質により工房の人員が選ばれたというイメージを創り出す意図があったとも考えられる。

#### (6) 他の芸術家の事例との比較・総合

一族の活動および後世の批評を他の芸術家一族と比較することで、ギルランダイオー族の特

徴を明確化するとともに、後世の批評史における「芸術家一族」という概念と近代的芸術家像の関係を分析した。近年、ポツライオーロ兄弟に関する研究でも指摘されたように（Galli, in Antonio e Piero del Pollaiuolo, 2014 など）、一族で活動した芸術家の工房内での役割分担はしばしば後世の芸術家伝説による極端な脚色の対象となった。芸術制作の「家業」としての側面と、芸術家個人の「才能」の関係について、ギルランダイオ以外の一族にも範囲を広げて考察した。また、婚姻を通じた芸術家一族の関係構築やその批評的記述については、ヴェネツィアのベッリーニ一族とマンテーニャの事例などを比較対象と分析した。またこの点に関しては、ラファエロやミケランジェロなど、後世のルネサンス的芸術家像を決定付けた画家・彫刻家を対象とした考察も行う。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、主たる対象としたギルランダイオ工房の実態の解明を進めるとともに、その工房を構成していた芸術家たちの構成の美術批評史上の位置づけを分析することで、ルネサンス期の工房制作と近代的芸術家概念の形成の一側面を明らかにすることができた。また、ギルランダイオ工房の事例を他の事例と比較することによって、ルネサンス美術全体に関わる問題の検討への端緒を得ることができた。以下にその成果を年度ごとの時系列に従って説明する。

研究の初年度である平成 28 年度には、中心的な研究対象となるギルランダイオ工房に関して、工房主のドメニコの弟ダヴィデおよびベネデットの活動を解明するための調査を主として行った。具体的には、コートールド美術館（ロンドン）、フィッツウィリアム美術館（ケンブリッジ）、アシュモリアン美術館（オックスフォード）などでの作品調査、ウィット・ライブラリー（ロンドン）や、マックス・プランク美術史研究所附属写真館（フィレンツェ）などでの写真資料を用いた調査、およびマックス・プランク美術史研究所附属図書館（フィレンツェ）などでの文献調査を行った。その調査をもとに、関連作品の情報を集約し、さらなる研究の基礎として利用できるように整えた。

上記の調査の結果、ダヴィデおよびベネデットの活動についての分析を進めることが可能となった。先行研究において、ダヴィデは工房のなかで周辺的な位置づけをされていたが、本研究においては肖像制作者としての役割を論じ、工房におけるダヴィデの活動の重要性を様式的分析を通じて明らかにした。その論考の一部は 2016 年 9 月に北京で開催された CIHA World Congress of Art History で口頭発表を行った。その内容は会議論集の一部として出版される予定である。

またベネデットについては、先行研究においてはまったく解明されていなかった初期の活動について、いわゆる「セントルイスの画家」がそれに相応するという説を得るにいたった。この分析の結果については、2017 年 5 月に開催される美術史学会全国大会で発表した。

平成 29 年度は、当初の予定に従い、関連作品の実見調査を進めるとともに、批評史的文献の精査を行った。また、夏期（8～9月）と春期（3月）の2度の現地調査を行い、関連作品の実見調査や関連資料の収集を行った。

夏期調査では、フィレンツェ、エゲペルス、パリなど、また春期調査ではロンドン、フィレンツェ、ナポリなどの美術館・教会などで関連作品の調査を行ったほか、文献資料の精査を進めた。

その結果、ドメニコ・ギルランダイオおよびその工房についての批評史的観点からの研究を進展させた。その内容の一部は、「ギルランダイオ工房のイメージと実態：15 世紀フィレンツェの芸術家工房」としてイタリア言語・文化研究会で口頭発表を行い、また「ギルランダイオ兄弟とその工房をめぐる言説と実態：ジョルジョ・ヴァザーリ『芸術家列伝』の記述の検討を中心に」として論文化し、『地中海学研究』41 号に投稿・掲載された。これらの研究においては、工房の運営者としてのギルランダイオの姿と、近代的な芸術家としてのギルランダイオの姿が、歴史的な文脈においてどのような変遷をもって形作られたかを分析の対象とした。

また、ギルランダイオ工房に参加した親族の一員として、ベネデット・ギルランダイオに関する調査を行い、その活動を解明にしたうえで、一族としての工房運営の実態の分析に活用した。その内容は、「ダヴィデおよびベネデット・ギルランダイオの画歴と『セントルイスの画家』の同定」として美術史学会において口頭発表を行ったほか、“Ghirlandaio Brothers Reconsidered: Benedetto Ghirlandaio and the Master of the Saint Louis Madonna”としてコートールド研究所（ロンドン）でも報告を行った。

最終年度となる平成 30 年度は、平成 28 年度から 29 年度のギルランダイオ一族に関する調査内容を中核として、発展的内容の研究を中心に行った。具体的には、ヴェネツィアのベッリーニ一族などの他地域で活躍した芸術家一族の事例や、フィレンツェでギルランダイオ一族と関係をもったラファエロの事例などを検討の対象とし、比較を行った。そのために、先行研究の検討に加えて、夏期に現地での調査を行い、ヴェネツィアやペルージャなどイタリア各地で作品実見を行うほか、ロンドン・ベルリンで行われたマンテーニャおよびベッリーニ展、フィレ

ンツェで行われたヴェロッキョ展などの内容を検討した。その結果、フィレンツェの事例を中心としつつも、イタリア・ルネサンス全体の動向を鑑みた分析を行うことが可能となった。

このうち、ラファエロの初期活動については、批評史上の新知見を得ることが可能となり、2018年7月には名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催シンポジウム「西洋美術史における 古典 と 古典主義」における発表（「古典の形成：チッタ・ディ・カステッロ時代のラファエロ」）を行ったほか、同発表を発展させた論文「ルネサンス期の古典概念とラファエロ初期様式の形成」を論集『古典主義再考』（木俣元一／松井裕美編）のために執筆した（原稿提出済み）。同研究においては、ルネサンス以降の典型的な芸術家像の成立と同時代の実際の制作との間の関係を分析し、ラファエロ初期の様式形成についてのヴァザーリの『美術家列伝』などの批評文献における偏向的記述を具体的な作品分析にもとづき明らかにした。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Takuma Ito, “In the Shadow of Domenico: The Workshop Practice of the Ghirlandaio Brothers,” *Proceedings of 34th World Congress of Art History, Beijing – Terms* (15–20 September 2016), Comité International d’Histoire de l’Art (CIHA) (invited, forthcoming).

伊藤拓真「ギルランダイオ兄弟とその工房をめぐる言説と実態：ジョルジョ・ヴァザーリ『美術家列伝』の記述の検討を中心に」、『地中海学研究』、地中海学会、41号、2018年5月、pp. 39-66（査読あり）。

〔学会発表〕(計4件)

伊藤拓真「古典の形成：チッタ・ディ・カステッロ時代のラファエロ」、名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催シンポジウム「西洋美術史における 古典 と 古典主義」における発表、於 名古屋大学、2018年7月14-15日。

Takuma Ito, “Ghirlandaio Brothers Reconsidered: Benedetto Ghirlandaio and the Master of the Saint Louis Madonna,” invited seminar, Courtauld Institute of Art (London), 13 March 2018.

伊藤拓真「ダヴィデおよびベネデット・ギルランダイオの画歴と『セントルイスの画家』の同定」、第70回美術史学会全国大会、於 関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）、2017年6月19日 - 21日。

Takuma Ito, “In the Shadow of Domenico: The Workshop Practice of the Ghirlandaio Brothers,” 34th World Congress of Art History, Beijing – Terms, Comité International d’Histoire de l’Art (CIHA), 15–20 September 2016, Central Academy of Fine Arts – Peking University.

〔図書〕(計1件)

伊藤拓真（執筆担当）「ルネサンス期の古典概念とラファエロ初期様式の形成：「オッディ祭壇画」におけるペルジーノ、ピントリッキオとの関係とヴァザーリ『美術家列伝』の記述」、木俣元一／松井裕美編『「古典主義」再考』（共著）、中央公論美術出版、刊行準備中。

## 6．研究組織

(1)研究分担者  
なし

(2)研究協力者  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。